

埋蔵文化財調査成果報告<< 3 >>・堂の前貝塚（米崎町）

陸前高田市教育委員会生涯学習課
加藤 隆也（福岡市より派遣）

堂の前貝塚は箱根山(446.8m)から南西方向に広がる丘陵の先端部に位置しており、標高 20～30m である。遺跡の南側には広田湾が広がり、現海岸線から 300m ほど内陸側にあります。

丘陵の北側には緩斜面が形成され、斜面下を勝木田川と和方川が西流し、周辺は低地となっており現在は水田として利用されています。それに対して丘陵の南側は海蝕崖となっています。

箱根山から延びる丘陵の一部は広田湾に突出し、米ヶ崎を形成しています。この米ヶ崎のつくりだす静かな入り江の存在が、縄文集落形成の大きな要因になったと考えられています。

貝層の分類調査では、岩礁性の巻貝であるクボガイと砂泥底に生息するとウミナ、アサリなど異なる水域に生息する貝類が出土していることが、そのことを裏付けています。哺乳類はクジラ目の一種とシカ・イノシシの三種の骨が出土しています。

気仙郡内における多くの貝塚は明治・大正時代から調査が行われており、当市における考古学の歩みは、縄文時代の貝塚研究によってなされてきたと言えます。

しかし、堂の前貝塚は昭和期に至るまで調査されることなく、遺跡の規模や性格などは長らく不明でした。そして、昭和 46 年に遺跡の内容を確認するために行われた発掘調査が最初の調査となりました。

今回の調査では 9 区、10 区を数え、合わせて約 3,000 m²を対象におこなっています。検出遺構のうち縄文時代に属するものには、中期、後期の竪穴住居 10 数棟、貯蔵穴 20 数基、集石土坑などがあります。

貯蔵穴では、フラスコ状を呈するものが多く、床面に扁平な円礫を敷くものや、石棒の素材となるような円柱状の石材がまとまって出土するものがみられました。

遺物では、土器以外に角礫に線刻を施した線刻礫をはじめ、石棒、石刀、異形石器などが出土しています。

特筆される遺構として、縄文時代遺物を含む土層の上から掘り込まれた、7 間×2 間の長大な掘立柱建物の発見があげられます。建物の方位は、ほぼ真北を指しています。

各柱穴の平面プランは 1 m 程度の略方形を呈しており、柱痕跡は明瞭で、その柱間寸法は柱芯から柱芯までで 230～240 cm です。柱材の抜き取り痕跡や、建物の建て替えはみられませんでした。

平成 9 年に隣接地で実施された農道の整備事業に伴う発掘において、この建物と柱筋を直行させて配置する 5 間×2 間の掘立柱建物と今回確認された建物の角柱と考えられる柱穴が調査されています。

この建物は、柱間の長さが 300 cm を超えるなど、建築構造上において、更なる大型化がうかがえます。

これら建物の立地や立柱構造とその配置から、同一計画図上の建物群であることは明瞭であり、このことから「L」字形又は「コ」字形に整然と建てられた公的施設であった可能性が考えられるようになりました。この仮説に立てば、2 間×5 間の建物が氷上山(874m)を北に背負い南面して建つ、建物群の中心建物であったと考えられます。ただ現在、柱穴内や周辺からは、これらの建物に伴う遺物が出土していないため、この建物群が建っていた時代やその性格は不明です。





